



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3 / TEL 045-774-9861 洋光台
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / 世話人代表 金子 敬・事務局
長 吉高 叶 / 支援する会HP <http://rwanda-wakai.net/>

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

巻頭言

興石 勇

NCC日本キリスト教協議会議長

こしいし いさむ

佐々木さんとREACHの挑戦

2007年にルワンダでの会議に出席する機会があり、わたしは1995年に『天使はわたしたちを見捨てた』という本を読んできて以来、気になっていたルワンダを訪れました。佐々木さんとお目にかかり、一緒に働いているフィルバートさんともお話しすることができました。ルワンダでのいくつかの場所の探訪は衝撃的でした。ようやく大虐殺のことが理解できるようになりました。ルワンダから帰国後、1994年当時国連平和監視軍の指揮官であったダレーレの著書も含めてルワンダ大虐殺に関する本を読み、映画もいくつか見ました。ルワンダが今も、双方からの報復戦争がいつ起こされるかわからない状況にあることも知らされました。

ルワンダ政府は対立してきた二部族の融和を推進しようといいますが、目の前で家族全員を殺され、自分も重傷を負わされながら故意に生かしておかれた被害者たちの心の傷はそう簡単に癒されるものではありません。だからこそ、行政とは別の、佐々木さんたちREACHの働きが重要なのだと思います。

わたしが見た映画の一つ『ルワンダの涙』はいろいろと考えさせてくれました。その映画の主人公の一人である英国人の若い青年は、自分が今まで「恵まれ」て生きてきたので、お礼のつもりで、かつての恩師である神父が、「恵まれない」ルワンダで運営する学校の教師として赴任します。しかし、大虐殺を目の当たりにし「神はいない」と絶望して帰国します。それとは対照的に、神父は「神は苦しむ者と共におられる」と信じ、ルワンダに留まり、ツチ族の子どもたちを虐殺者の手から逃れさせる途中、かつての教え子に射殺されます。「他者のために死ぬことこそ復活なのだ」というのもその神父の信念でした。

REACHの働きは、「苦しむ者の中に」神を求めようとする働きなのではないかとわたしは思っています。制度や建物としての教会の中に神はいないということをREACHはキリスト教徒全員に示しているのではないのでしょうか。



佐々木和之

ささきかずゆき

大きな失望を乗り越える力

働きを続けていくことができるのは、想像を絶するような厳しい境遇の中にありながらも、神様の愛に生かされ歩んでいる人々と出会うことができるからに他なりません。

ムラーホ！今、日本は蒸し暑い季節になっていることでしょう。活動報告のための帰国を間近に控えこのお手紙を書いています。2ヶ月間の日本滞在になりますが、出来る限り多くの皆さまにお会いしたいと願っています。

■ 虐殺犠牲者追悼週

ルワンダではジェノサイドが始まった4月7日からの1週間は虐殺犠牲者追悼週と定めています。今年もこの時期、ガチャチャ裁判で自白した加害者からの情報をもとに掘り起こされた犠牲者の遺骨の埋葬式典が、全国各地で開かれました。例年お祝い事の一切が自粛されるなど、ルワンダ中が厳粛な雰囲気にも包まれるのですが、今年追悼週はいつになく緊迫したものになりました。

4月10日の午後7時10分頃、キガリのジェノサイド記念資料館に何者かが手榴弾を投げ込み、警備中の警察官1名が死亡、もう1名が負傷するという大変ショッキングな事件が発生しました。犯人はまだ逮捕されておらず、犯行声明も出されていないため、誰が何の目的のために行った犯罪であるかについては、今のところ全く推測の域を出ません。しかし、これがルワンダ社会の緊張を高め、現政権の不安定化を目論む勢力による犯行だとの見方をする人たちが少なくありません。

ルワンダでは近年、国会の特別委員会により、差別や虐殺を肯定するイデオロギーが社会に蔓延しているとの報告が度々なされています。特に昨年から今年に

かけては、学校内に「ジェノサイド・イデオロギー」が蔓延し、虐殺生存者の生徒たちに対するハラスメントが続発しているとの報告がなされ、社会問題になりました。それを受けて、4月2日からの3週間、全国の初等及び中等学校の全ての教師に対する「特別集中講習」が実施されるという事態にまで発展したのです。そんな中、追悼週の最終日にあたる4月13日、REACHが活動するキレヘ郡の虐殺犠牲者追悼式典に参加しました。キレヘ郡役場の前の広場を会場に3千人以上の人々が集まり、カトリック教会の司祭によるミサの後、4つの棺桶におさめられた100体の遺骨が集団墓地に埋葬されました。最前列には、「償いのプロジェクト」を通して知り合ったステファニアさんの長男ダニエル君（前号参照）が、悲しみのためでしょうか、あるいは憤りのためでしょうか、顔を歪めながらお墓に立てる十字架を持って立っていました。深さ1メートルほどの集団墓地の一面に安置されていく棺桶をじっと見つめる虐殺生存者の家族。あちらこちらから叫び声やうめき声が発せられ、中には、救護係に担ぎ出される遺族もいました。

埋葬の後、集っていた群衆を前に何人かの人々の演説が始まりました。まず、虐殺生存者の団体であるイブカ（「記憶せよ！」の意）の代表者である女性が、とても厳しい表情で語り始めました。彼女は、ジェノサイドから14年たった今も、虐殺生存者の多くが貧困状況から抜け出せないまま放置されていること、そして、繰り返される虐殺生存者の暗殺を防止す

る有効な措置が取られていないことにたいして怒りをぶちまけました。彼女の後には来賓のルワンダ国軍の将軍、そして、キレヘ郡首長の演説が続きました。これら2名の演説では、遺族への慰めの言葉などほとんど無く、未だに心を改めていない「虐殺を犯した側」の人々に対する糾弾に多大の時間が割かれていました。



虐殺犠牲者埋葬式

■新たな一步を踏み出した人々

これまでお伝えしたことから明らかに、ジェノサイドは決して過去の事柄になっていませんし、ルワンダの人々の和解への道のりも、これまで同様けわしいものであり続けています。しかしルワンダには、赦しと和解への歩みを続けている人々がいることも事実なのです。

今年の3月、REACHが支援する協働グループで手工芸品製作に取り組む二人の女性に出会いました。そのうちの一人デボラさんは、指導員として他の女性達の技術向上のために働いてきた方です。彼女の夫は、虐殺加害者として服役中に獄死したということです。もう一人の女性フェレスタさんは、ジェノサイドで夫を惨殺された虐殺生存者です。これまでの歩みや協働グループの活動について話を聞いた後、となりどうしに座っていた二人にお互いへのメッセージを語ってもらいました。

デボラさんは、「立場は違っても寡婦として困難を潜り抜けてきた者どうし、

助け合いながら生きていきましょう」と呼びかけました。それに対しフェレスタさんは、「私は、間もなく夫の亡骸を葬ります。その時、どうか私と一緒にいて下さい」と言ったのでした。

キレヘ郡で追悼式典が行われた4月13日、フェレスタさんは夫の亡骸を葬りました。式典中は終始厳しい表情でしたが、終了後はとても穏やかな顔をしていました。そして、私を自宅に招いてくれたのでした。車で10分位離れた所にある彼女の家に到着すると、その前の空き地にくつものベンチが並べられ、近隣の人々が大勢座っていました。中に入ると、居間に彼女の親類縁者など20名くらいの人々が集まっていました。その中に私は、デボラさんの顔を見つけたのでした。14年の歳月の末、愛する夫の亡骸を葬った女性と虐殺加害者を夫として持っていた女性が、同じ場所で共に時を過ごしたのです。この二人の女性の和解への歩みに、新たな、そして大きな一頁が刻まれたのでした。



フェレスタさん(右)とデボラさん(左)

■和解の働きを担う3人の女性達

3月31日からの3日間、ブグセラ郡ニヤマタで女性を対象とした癒しと和解のセミナーの第2回目を実施しました。虐殺生存者の女性達、加害者を夫に持つ女性達、殺害された側と荷担した側の両方の家族の板挟みになっている女性達(例えば、ツチの夫を殺害されたフツの

女性やその子ども達)、計55名が参加しました。今回のセミナーには、キレヘ郡でREACHの活動に参加している3名の女性達がゲストとして招かれました。まず虐殺でツチの夫と子ども達を殺され、自らも集団レイプにあったというフツのアグネスさん(ウブムエ6号4頁)。彼女は担当したトラウマからの癒しに関する講義の中で、悲惨の極みから生還した後、深い傷から癒されてきた者にしか語り得ない経験を語りました。彼女の言葉の一つひとつは、参加者への配慮と自信に満ちていました。二人目はユディトさん(ウブムエ7・8号)。彼女はツチの虐殺生存者ですが、夫と一人息子を殺害された体験を語った後、5人の孤児を自分の家に引き取って面倒を見ていること、その中には、虐殺に加担して国外逃亡した男性の息子が含まれていることを証言し、参加者に深い感銘を与えました。最後に、ジェノサイド当時、旧政権の村落レベルのリーダーであったフツのアナスターゼさん(ウブムエ7及び9号)。彼女は、自分自身が虐殺に荷担した罪を告白するに至った経緯と、その過程で与えられたという聖書のことばを分かち合いながら、何一つ言い訳などすることなく、真実の告白と謝罪を続けることが自分の責務だと言い切りました。また、虐殺加害者として「償いのプロジェクト」に参加した体験について語りました。これら3人の女性達の存在により、REACHの癒しと和解のセミナーは、これまでとは比べものにならないほど豊かなものになったのでした。

全日程終了後、私達家族は3人の女性達を自宅に招き、共に食卓を囲みました。彼女達は大喜びで、REACHの代表カリサさんに電話で「女王様のような待遇を受けている」と伝えたそうです。食事の後、家族の写真を見せたりしながら歓談して過ごしました。そして、宿舎に送っていく前のこと、3人が私達のために合唱を披露してくれたのでした。満面の笑顔で、明るいリズムカルな歌を口ずさみながら

車に乗り込んでいく彼女達を見ながら、まさにイエス・キリストの言う「神の国」が我が家に訪れたのだと感じました。虐殺で肉親を失い、自らも深く傷つけられた女性達と、その犯罪に加担したことを告白した女性(しかも、彼女の夫は今も服役中です)が、今ここで神様への賛美と感謝を声を合わせて歌っている。私はあの光景を一生忘れることはないでしょう。



アグネスさん(左)とアナスターゼさん(右)

■受刑者復帰に向けて

一時停止に追い込まれていた「償いのプロジェクト」の再開のためにお祈り下さりありがとうございます(前号参照)。REACH代表カリサさんの政府当局との粘り強い交渉の結果、プロジェクトの住宅建設への労働奉仕刑受刑者の復帰が秒読み段階に入りました。6月中旬までには、60名の受刑者による住宅建設が再開される見込みです。

プロジェクトの再開自体は大変喜ばしいことなのですが、受刑者の復帰に関して2つの条件が付けられたことをお伝えしなければなりません。まず第1は、プロジェクトに参加できるのが、政府によって設置されたキャンプに収容されている受刑者に限定されたことです。以前は、プロジェクトに参加する受刑者が自宅に寝泊まりすることが許可されていたのですが、今後は、集団でキャンプ生活をし、そこから建設現場まで通ってくることに

なります。第2は、受刑者による住宅建設が、キャンプから徒歩で通える圏内にある建設現場に限定されたことです。その結果、これから新規に着工する計13軒のうち、受刑者によって建設される住宅は7軒のみになりました。残りの6軒の建設に必要な労働力は、キレへ郡政府が一般の地域住民を動員して賄うことが決まりました。REACHとしては、キャンプから徒歩で通える圏外での住宅建設については、キャンプに收容しきれずに自宅待機を命じられている加害者が参加できるように交渉を試みましたが、「政府の方針に反する」との理由で却下されました。

このようなことから、これまで私達がこだわってきた地域密着型の労働奉仕刑（前号参照）が少なくとも当面の間実施出来なくなってしまうことをとても残念に思います。現在キレへ郡内で労働奉仕刑を宣告された加害者は、少なくとも1,200人いると言われています。（この数は、今後さらに増えることが予想されます。）そのうち郡政府が設営したキャンプに收容されている受刑者は200人に過ぎません。残りの1,000人は、新しいキャンプの設営まで刑を受け始めることが出来ず、自宅待機を命じられたままなのです。

昨今の厳しいルワンダの政治状況を考えると、約8ヶ月という短い期間ではあったものの、最善であると判断したやり方で「償いのプロジェクト」を実施できたことは、とても幸いなことであつたと言えるかもしれません。そのことを通して、私達は和解に向けての確かな手応えをつかんだわけですし、参加した受刑者達の何人かとは心の通う関係を構築することが出来たからです。そして、プロジェクトの受益者である虐殺生存者と、受刑者である虐殺加害者の関係修復という面でも大きな一歩を踏み出すことが出来たのです。このことによって、REACHの平和と和解のプログラムは、以前よりずっと豊かなものになりました。以前は、セミナーなどの場で和解について話し合

ったり、祈り合う人々の輪の中に直接の虐殺加害者はいませんでした。彼・彼女らの家族と虐殺生存者側の家族がいたのみです。しかし今は、真摯な謝罪と償いの姿勢が評価され、仲間として受け入れられた加害者がその中にいるのです。

私達の現場で地域密着型の労働奉仕刑の道が当分のあいだ閉ざされたことは、明らかに一步後退です。しかし、だからといって、プロジェクトを通じて修復的正義を実現する道が閉ざされたわけではありません。私達はこれからも、そのために全力を尽くしていきたいと思います。

■マクラタさんと男の子

郡政府と今後のプロジェクトのあり方についての協議を終えた日、私は徒労感にも似た何ともやりきれない気持ちで役場を後にしようとしていました。車に乗り込み帰路につこうとしたその時、私と同僚達の前をマクラタさんというプロジェクトの受益者女性が通りかかったのです。よく見ると、背中に小さな男の子をおぶっています。まだ2歳になったばかりという男の子は、おんぶ用の布にくるまれるようにして、安らかな顔で眠っていました。その男の子の顔がこちらに見えるように、背中越しに笑顔を向けるマクラタさんから、ホンワカとした暖かい雰囲気醸し出されていました。その彼女と言葉を交わす中で、乾いていた私の心は潤いを取り戻したのです。

ある深刻な事情により8年前に離婚して以来、マクラタさんは親戚の家に身を寄せ、今年14歳になる娘と11歳になる娘を女手一つで育ててきました。ですからその日、彼女がおぶっていた男の子は彼女自身の子ではありません。3ヶ月前に彼女が引き取り、育て始めた孤児なのです。

1ヶ月近く前のこと、キレへ郡のある教会を会場にして、REACHは虐殺犠牲者の遺族を慰め励ますために祈祷会を開きました。私は、その会に参加していたマク

ラタさんがこのように話しているのを耳にしました。「私と子ども達のことを哀れんで我が家を与えて下さったのは神様です。私はその家を用いて、家の無い人々をもてなしていくつもりです」。そして、町で行き倒れ同然になっていた10歳の少年をしばらく自宅で世話し、故郷の両親のところまで連れて行ったことや、その後、幼い孤児を引き取って育て始めたことを話してくれたのでした。私は、いつかじっくり話を聞こうと思っていたのですが、神様は、キレヘ郡役場での協議を終え、疲れと乾きを感じていた私のところに、彼女と小さな男の子を送って下さったのでした。

私達の平和と和解の働きは、山あり谷あり、息切れしたり疲れて座り込んでしまいそうになることが度々です。取り組んでいる課題のあまりの重さに押しつぶされてしまうように感じることもあります。しかし、そんな中でも働きを続けていくことができるのは、想像を絶するような厳しい境遇の中にもありながらも、神様の愛に生かされ歩んでいる人々と出

会うことが出来るからに他なりません。今回も、大きな失望を乗り越える力を与えてくれたのは、まさにそのような人々との出会いでした。

なかなか順調にことは進みませんが、それはそれだけ手強い課題に取り組んでいるからなのだと、自分を納得させています。どうかこれからも、修復的正義の実現を通して、ルワンダの人々の和解への歩みが前進していきますようにお祈りください。
(5月31日記)



マクラタさんと男の子

佐々木 恵
ささき めぐみ

新しい意欲をいただいて

こうしてまた、ルワンダに神様が戻して下さったことを改めて感謝しているところです。

4月の下旬から3週間ほど、健康診断のために日本に一時帰国していました。昨年8月に手術をした方の左肩にしこりがあるのに気づき、癌との関連が気になっての一時帰国でした。はじめの一週間は、毎日のように病院に通っていろいろと検査を受けました。その結果、癌との関連は全くないということでした。ついでに術後の定期健診もすませ、すべて異常なしということで、安心してルワンダ

に帰ってきました。実は大分長い間、しこりと癌の関係にとっても悩んでいて、いてもたってもいられなくなったの帰国でした。キガリ空港を飛び立った飛行機の中では、「神様の御手から、全てを受け取っていく信仰が与えられますように」と祈りつつ、朝もやに浮かぶ千の丘の美しさを心に刻んでいました。こうしてまた、ルワンダに神様が戻して下さったことを改めて感謝しているところです。

ところで、万緑の鹿児島は 10 年ぶりでした。2・3 年ごとに鹿児島には帰るのですが、万緑の萌え出る季節に日本にいるのは、なんと、10 年ぶりのことでした。病院通いを終えた次の週は、毎日のように母と一緒に自然の中に繰り出していました。叔母と出かけた宮崎の都井岬、友と出かけた坊津、また、イギリス時代の友人が連れて行ってくれた窯元めぐり。どこに行っても万緑の美しさが目に焼きつきました。南の国鹿児島は、まだまだ原生林が残っていてその緑も深く、山々はいろいろな木々に覆われています。そしてその木々が芽吹く・花咲くこの季節、「山笑う」と俳句の季語にあるように、微妙な明度・彩度の違いによる緑が山を命あるものにしていました。雨の中ドライブした坊津は、まるで緑が海になだれ込むかのような圧倒的な万緑でした。帰省する度に思うのは、故郷の気候風土が、私の血になり肉になっているということです。鹿児島島の地に立つと、大地と自分が一体化し、体が息を吹き返すかのごとく感じるのです。特に今回、万緑の季節を経験して、自然の息吹のその力まで頂いたように感じました。

今回の日本への帰国でもうひとつ印象に残ったことがありました。それは、私に関わっているピース・インターナショナル・スクールのことです。隔週の土曜日の午前中に出かけて行って、折り紙や日本語、日本の伝承遊びや歌などを教えているのですが、その小さい学校のことを、多くの方々が祈りに覚えて祈っていて下さるということでした。バプテスト女性連合では、世界祈禱週間の献金を、今年度この学校のためにも献げて下さることになっていますし、関東学院三春台小学校とは、ここ 2 年ほど交流が続いています。また、いくつかのバプテスト連盟の小羊会の子も達からもプレゼントを頂いたり、献金を献げて頂いています。こ

のように祈りを通してたくさんの方々が、この学校のことを覚えていて下さることに改めて気づかされました。2 年近く続いてきたこの学校との関わりも、これくらいよいよ充実したものにしていきたいと、新たな意欲を頂きました。



P.I.Sで手遊びを教える

さて、3 週間ぶりにルワンダに帰ってきて改めて思うのは、小鳥の鳴き声のすばらしさです。来る朝ごとに、鳥のさえずりの中で目覚め、また、たそがれ時を、鳥のさえずりの中で迎え、一日を終えるのです。この鳥達のように、朝に夕に感謝の歌を歌えるようになりたいものです。

(5 月 30 日記)

【家族の近況・お祈りください】

萌：6 月末に帰国予定。1 ヶ月間バイトをしてから国内旅行を計画中。9 月にはケニアの寄宿学校に進学予定。

仁：英語劇で主役を演じました。サッカーの対外試合では連敗中。今度は勝つぞ！

共喜：女の子にもてること間違いなしと父親に勧められ、ギターを始めました。サッカーチームでキャプテンに抜擢されるも連敗中。

恵：肩こり対策のためヨガを始めました。

和之：蒸し暑い日本での「夏期巡業」を乗り切れるか少し不安です。

佐々木和之さんが一時帰国されます！

佐々木さんを支援する会・報告集会のご案内

佐々木さんの活動をおぼえ、祈りや献金で支援してくださっているみなさま。心から感謝いたします。今年、6月7日～8月5日にかけて、佐々木和之さんが帰国されます。全国各地の教会や学校、キャンプなどに招かれて多くの報告集会が計画されています。

そして、「佐々木さんを支援する会」としての報告集会を下記のように計画いたしました。心からの感謝をもってご招待申し上げます。ぜひとも、お集まりください。

●日時 7月21日(月・休) 午後2時～4時30分

●会場 日本キリスト教団・富士見町教会2Fホール

(JR飯田橋駅・西出口)

【プログラム】

スライドとお話しによる報告
佐々木和之さん
支援する喜びの報告
支援者たちから
子どもたちからの
応援パフォーマンス(予定)

入場無料!! どなたさまもご入場いただけます。

託児の用意もございます。

ただし、駐車場はありません。



—昨年、広島バプテスト教会での報告集会の様子

お待たせしました!!

佐々木さんを支援する会のHP(ホームページ)ができました。

支援する会の紹介 現地レポート ニュースレター 事務局からの案内
ルワンダの活動・写真館

などが閲覧いただけます。またHPから、入会手続きも可能です。

知人・友人に下のURL(インターネット上の住所)をお伝えください。

<http://rwanda-wakai.net/>

世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、
村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶(栗ヶ沢教会牧師)